

国立国語研究所学術情報リポジトリ

<講演3>アイヌ語は日本語に似たようなものなのかな？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ブガエワ, アンナ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000910

アイヌ語は日本語に似たようなものか?

アンナ・ブガエワ(早稲田大学准教授)

Anna BUGAEVA

早稲田大学高等研究所准教授(当時)。専門は、アイヌ語コーパス、言語類型論、アイヌ語動詞範疇。主な業績に『音声付きアイヌ語辞典——新編 金澤版アイヌ語会話辞典』(ロンドン大学アジアアフリカ学部HP、2010年)など。



irankarapte(イランカラプテ)。こんにちは。私の母語は実はアイヌ語ではなくて、ロシア語です。私はロシアのサンクト・ペテルブルグ(当時のレニングラード)に生まれました。ペテルブルグという町は北欧に近いところです。私は、ペテルブルグ大学を卒業後、国費留学生として日本にきました。私のアイヌ語の研究は、日本への興味から始まりました。ペテルブルグ大学東洋学部の日本語学科で勉強しているうちに、日本語の起源問題に関心を持つようになりました。日本語の起源問題を探るとき、必ずアイヌ語の話が出てきます。しかし、当時のロシアには、日本人の研究者が書いた論文が全くなかったため、日本に留学することにしました。アイヌ語を研究するならもちろん北海道大学です。北海道大学の大学院に入り、そこで学位を取得し、千葉大学の研究員、そしてオーストラリア・ラトローブ大学の研究員を経て、現在、早稲田大学高等研究所のポストに就任しています(当時)。私の研究分野は記述言語学(アイヌ語)そして、今日、角田先生のご発表にありました言語類型論です。

◆アイヌの背景および現状

「アイヌ」という言葉は、アイヌ語で「人間」という意味です。アイヌ民族は日本とロシアにまたがる北方民族の一つです。昔は、北海道だけではなく、本州の北東部、クリル諸島、そしてサハリン南部にも住んでいました。かなり広い地域に住んでいた民族です。アイヌ民族は自然とともに平和に暮らしていました。

した。自然の知恵を学び、素朴な生活を送っていました。そこから伝統的な文化や固有の言語による豊富な口承文芸を生み出しました。

なぜ口承文芸なのかというと、固有の文字を持たないためです。ただ、文字を持たないことで、どこか劣っているなどということでは絶対にありません。皆さんもご存じだと思いますが、アイヌの有名な文学として広く「ユーカラ」が知られています。この「ユーカラ」を語るのには普通、二晩かかります。かなり複雑で、口承文芸ではありますがとても難しいです。アイヌ語は、文字を持たない言語なので、基本的に録音機を持って言語調査に行き、録音をして、資料を持ってきて、音声から書き起こしをします。アイヌ語を書くためにはローマ字か片仮名を使います。後でご紹介します。

アイヌ語は日本語と同じ言語ではありません。全く違う言語です。アイヌ語は日本語の方言でもありません。先ほど起源問題について少し触れましたが、アイヌ語の起源がどこかということは、実は大問題です。日本語のほかに印欧語族、(ヨーロッパの諸言語、フランス語やロシア語など、また英語のような言語)との比較の試みがありました。その他、アルタイ語族、モンゴル諸言語やトルコの諸言語、ツングース諸語、そしてオーストロネシアの言語との比較の試みもありました。先ほどの片桐先生のお話にありましたが、タガログ語やインドネシア語など、ハイイやマオリの言語は全てオーストロネシア語族に属しています。それから、韓国語、サハリンの原住民



フィールドワークの様子

が話しているニヴフ語、そしてエスキモー語、バスクリン語までも比較が試みられましたが、いずれも推測のレベルにすぎませんでした。このようにアイヌ語はなかなか不思議な言語です。

アイヌ語には方言差があります。大きく北海道方言、それからクリル方言、サハリン方言に分かれていますが、北海道の方言内でも大きく二つに分かれています。北東方言と南西方言です。現在、アイヌ語は消滅危機に近い状態です。話者が全くいないとはまだ言えませんが、いても3人程度です。みなさん北海道南部の日高地方に住んでいます。私自身が調査をしたのもこの辺りでした。

◆アイヌ語の社会言語学的状況

アイヌ語が日常会話に使用されなくなったのは1950年代ごろでした。その原因は、国家による激しい民族的な言語的な圧制を強いられたことです。その結果、言語の急速な放棄が起こり、残念なことに次の世代に伝わらなくなりました。このような現象は日本に限らず、世界中どこにでもあります。

ロシアにもかなり数多くの言葉がありますが、シベリアなどの原住民の言葉は、アイヌ語と同様にはほぼ消滅危機に近い状態です。50年後には全く無くなってしまう可能性があります。オーストラリアもううです。そして、今日、角田先生のお話にもあります。

たが、マオリ、それから北アメリカでももちろんそうです。

ただ、近年はアイヌ語の復興活動に力を入れる人が増えてきました。そのきっかけは、アイヌ文化振興法と、アイヌを北海道の先住民とする公的な承認でした。ごく最近のことです。私もこれに協力して、最近オンラインのアイヌ語の会話辞典を作りました。オンラインで4000ぐらいの音声ファイルを聞けるようになっています。参考文献も挙げています。

◆アイヌ語は日本語に似たようなものか？

早速、今日の話題に入りたいと思います。「アイヌ語は日本語に似たようなものか？」、私がよく受ける質問です。結論から言いますと、アイヌ語と日本語は深いレベルで非常に異なる言語です。ただ、似たようなところも、もちろんあります。ロシア語と比べると、日本語の方がずっと近いと言えます。しかし、ロシア語に似たような現象もあります。だからと言ってロシア語と関係があるということでもありません。

日本語とどこが違うか。例えばアイヌ語は、私の母語のロシア語のように動詞が人称による変化をします。人称は「私、あなた、あなたたち、彼ら」などです。代名詞のようなものです。そういう代名詞的な要素を動詞の中に入れると、動詞が変化します。例えばロシア語だと*Япишу. Мы пишем. Ты пишешь. Вы пишете. Он/она/они пишут。「私が書きます。私たちが書きます。あなたが書きます。あなたたちが書きます。彼ら・彼女・彼らが書きます」と、人称によって動詞の形が変わります。

アイヌ語の「私が魚をとった」という例文は、「(káni) cep ku=koyki. (カニ チエプ ク=コイキ)」です。動詞にくつついている「ku(ク)」は「私」に当たります。外にも「私(káni)」が付いているのですが、それは使っても使わなくてもいいです。これは日本語と同じです。「魚をとったよ」のように、「私」と

言わなくてもいいのです。アイヌ語も同じなのです。だから括弧に入れています。ただ、この動詞にくつについている「ku」を省略してはいけません。動詞変化は義務的で、ロシア語やスペイン語と同じです。

(káni) *cep ku=koyki.*

ku = koyki

ク = コイキ

私(が) = とる

「私が魚を取った。」

ただ、ロシア語と違うところは、目的語の標識も付けるという点です。例えば「とる」という動詞は、ほかに「叱る」や「いじめる」などの意味もあるのですが、「私をいじめた」は「en=koyki (エン=コイキ)」になります。ロシア語では目的語の人称によっては変化しません。主語の人称による変化だけです。目的語の変化はありません。日本語と違うところは、「が」と「を」のような格助詞がないところです。「kani (カニ):私」にも何も付いていないし、「cep (チエプ):魚」にも付いていません。だから、誰が誰に対して何をしているかというのは、その動詞の形で分かります。これを省略してはいけません。私は省略してしまってアイヌのおばあさんに何度も何度も怒られました。

それから、片桐先生のお話にもありました、アイヌ語もタガログ語と同じように時制のマーカー(標識)がありません。この「koyki (コイキ):とる」という動詞を見ますと、とったか、明日とるか、今とっているかは分かりません。文脈で判断します。副詞を付け、「Nisat-ta (ニサッタ):明日」と言えば未来の解釈になりますが、何も付けないと分かりません。これも少し不思議です。英語を習っている人は、さんざん苦労して英語の時制やアスペクトを勉強していますが、ロシア人にとってもあれはかなり難しいです。でも、アイヌ語はこの点は何も苦労しません。

◆アイヌ語にあって日本語にはない動詞の変化

時制の話とは逆に、アイヌ語にあって日本語にはない動詞の変化もたくさんあります。例えば、「私はそのお酒で神の祈りの儀式をする」、祈祷するのです。その場合は、「で」に当たるような格助詞はアイヌ語にもあります。これは「酒で神を祈る」という日本語に似たようなパターンです。全くではないですが、ある程度似ています。ただ、それを使わないで、格助詞「で」に当たるようなものを、動詞の中に取り込む、「で - 神 - 祈る」という言い方もあります。前者は自動詞だったのですけれども、後者のようなやり方をすると他動詞になります。「酒」は目的語になります。つまり、格助詞、「が」や「を」を除いて、「で」や「と」の格助詞を動詞の中に取り込む場合があります。それは日本語とだいぶ違うところです。

「で」の概念を動詞の接頭辞エ-で表現する文

ne sake a=e-kamuy-nomi.

ネ サケ ア=エ - カムイ - ノミ.

この/その 酒 主人の私(が)=で・神-祭る

「私はその酒で神に祈祷の儀式をした。」

〔文献4.p.86〕

「で」の概念を格助詞で表現する文(日本語と同じ)

ne sake ani kamuy-nomi=an.

ネ サケ アニ カムイ-ノミ=アン.

この/その 酒 で 神-祭る=主人公の私(が)

「私はその酒で神に祈祷の儀式をした。」

ちなみに「神をお酒で拝む」はどういうことなのでしょうか。アイヌの宗教は基本的にアニミズムです。動物や植物など、どんなものにも魂があるという信仰です。アイヌの世界像は、大きくkamuy mosirカム

イモシリ(神々の国)とaynu mosirアイヌモシリ(人間の世界)に分かれています。動物は全てカムイで、カムイモシリからアイヌモシリに降りてきます。降りてくるときは、動物を装って降りてきます。本当は人間のような姿をしているのかもしれません、人間の世界に来るときは動物の格好をして、毛皮や肉を人間にお土産として持ってくるという考えです。ですから、人間は動物を殺すときに、ただ殺すのではなく、祈りながら殺すべきだという考えが強いです。

例えば獵に行って熊を獲ると、その場で必ずお祈りします。酒とイナウを使います。イナウは柳などできただ房状の祭具です。いろいろな形があります。日本から交易で漆物も入ってきていました。これをアイヌの人はお酒を飲んで拝むときに使い、何よりも大事にしていました。自分たちでも立派な木彫りのものを作つて日常生活の中で使っていましたが、儀式用の神を拝むときに使うものは日本人が作ったものを使っていました。ですから、アイヌの人にとって、日本人はある意味で交易のとても大事なパートナーでもありました。農業がなかったので、穀物も日本人から手に入れしていました。そして漆物をみんなが欲しがり、これで戦争が起こっていたような記録もあります。

もう一つ面白いのは、いわゆる名詞抱合です。日本語で例えれば五つの単語でしか言えないような文

があります。「私が魚をとった」、五つです。同じような言い方がアイヌ語にもあります。つまり、*kani cep ku=koyki*(カニ チエブ、ク=コイキ)という前に示した文のように幾つかの単語を使っても言えますが、実はこの「cep(チエブ)、魚」を動詞の中に取り込むことも可能です。「ku=cep-koyki(ク=チエブ、コイキ)私が魚をとった」のようになります。実際抱合されているといえるのは、「ku=(ク)」が付いているからです。「ku=(ク)」は一番端っこに付けるので、「cep(チエブ)」がその後に来ているから、動詞の一部を成している証拠です。

名詞抱合の文

ku=cep-koyki.

ク=チエブ - コイキ.

私(が)=魚 - とる.

直訳：「私魚釣った。」

「私が魚をとった。」

[文献4,p.46]

このように、アイヌ語と日本語はかなり違うにもかかわらず、私自身が早稲田大学でアイヌ語を教えるときには、日本人の学習者から「結構似ているじゃないか」という意見が多いです。同じクラスに留学生のヨーロッパの人がいても、日本人の学習者の方が習得はずっと早いです。私も北海道大学でそういう経験がありました。北海道大学でアイヌ語を勉強したとき、ロシアでは英語のクラスで成績がトップだったにもかかわらず、なぜアイヌ語ではこんなについていけないのか、なぜ一番ではないのかと不思議に思っていました。アイヌ語は、やはり日本人の方が習得が早いです。

その理由は幾つかあると思います。まず日本語とアイヌ語は語順が同じです。両言語の語順はSOV、「私-魚-捕った」です。英語やロシア語だと「私-捕った-魚」です。もう一つの大きな理由は、



囲炉裏の横のイナウ

角田先生をはじめ、ほかの発表者が紹介した人魚構文です。人魚構文はアイヌ語にもあります。奇妙な人魚です。日本語を勉強するときにもさんざん苦労したのですが、アイヌ語を始めて、また苦労しました。人魚構文はなかなかヨーロッパの言語には訳しづらいです。英語の例文を司会のホイットマン先生に今日紹介していただきましたが、ロシア語には訳し辛いです。いくら辞書を引いても、きれいな文章にはなりません。

◆アイヌ語の人魚構文

アイヌ語にも人魚構文がありますが、日本語ほど「締め」のところの名詞の種類はありません。例えば角田先生のご報告によると、日本語には106種類ありますが、アイヌ語には10種類だけです。しかし、使用頻度が日本語に劣らず非常に高いです。名詞は10種類あって、コピュラは一つ、「ne(ネ)」です。時制で変わりません。「予定だった」のような過去形ではなく、「予定である」のようになります。名詞はいわゆる所属形を取って、日本語に直訳すれば「～わけだ」ではなく、「～のわけだ」「そのわけだ」のようになります。意味は日本語の場合とよく似ていると思います。いわゆる証拠性とモダリティやアスペクト、そのほかの意味があります。

早速、見ていただきたいと思います。「mosir-pa-un-sar(モシリ-パ-ウン-サラ)から夜襲が来たのだ」。 「夜襲」は、先ほどのイコロ「宝物」、日本人から交易で手に入れた漆を奪いに来たという意味です。ここまでが人魚の頭です。次からが尻尾です。文字どおりで言うと、「モシリ-パ-ウン-サラから夜襲が来た跡である」、あるいは「その跡である」です。ru-w-e(ル-ウ-エ)は「その跡」です。

[mosir-pa-un-sar or wa topattumi ek] **ru-w-e ne.**
[モシリ-パ-ウン-サラ オロワトパツウミ エク] ル-ウ-エ ネ。
(神話的な地名)ところから夜襲来る単 跡-挿-所属 だ

直訳:「モシリ-パ-ウン-サラから夜襲が来た跡である。」

証拠性・推測(思考上の発言)

「モシリ-パ-ウン-サラから夜襲が来たのだ。」
〔文献5.p.130〕

証拠性とはどういう意味かを説明したいと思います。アイヌ語には時制がありませんが、大事な証拠性というカテゴリーがあります。証拠性は、ある発言の情報源が何であるかということです。アイヌ語においてこの証拠性は人魚構文によって表されています。証拠性の意味を持つ名詞は四つあります。「ru-w-e(ルウェ)、～の跡」「haw-e(ハウエ)、～の声」「sir-i(シリ)、～様子」「hum-i(フムイ)、～の音」です。思考上の発言、伝聞上の発言、視覚上の発言、感覚上の発言のように、情報源がどこにあるかを明確にさせるような面白い構文です。

例えば「もうお前も十分大人になったのだ」は、直訳すると「お前が大きくなった跡だ」となります。その大きくなった人は、今はどこかへ行って自分の目の前にはおらず、私はそのことを思い出してそう思うのです。だから「跡」を使います。

証拠性・推測(思考上の発言)

[tane e=poro]	ru-w-e	ne.
[タネ エ=ポロ]	ル-ウ-エ	ネ.
もう 貴方(が)=大きい/大きくなる	跡-挿-所属	だ
直訳:「もうお前も大きくなった跡だ。」		
「もうお前も(十分)大人になったのだ。」		
〔K7708242UP.223〕		

その次は、「わが長者殿が来(てくれ)たそうです」。直訳すると「来た声だ」になりますが、「来たそうだ」という意味になります。例えば隣人からそのように聞いて言う場合にこのような構文を使います。考えたのでもなく、見たわけでもなく、聞いて、そう

言っているのです。

証拠性.報告(伝聞上の発言)

[*a=kor nispa ek] haw-e ne.*
[ア=コロ ニシパ エク] ハウ-エ ネ.
主人公の私(が)=持つ長者 来る.単 声-所属 だ
直訳:「わが長者殿が来た声だ。」
「わが長者殿が来(てくれた)たそうだ。」
〔K8010281.UP.059〕

もう一つは様子です。「*húci ek kor an sir-i ne.*」(フチ エク コロ アン シリイ ネ)、おばあさんが今来ているところだ。目の前にいるため、「*sir-i*(シリイ)」を使って、「その様子だ」と言います。

証拠性.視覚(視覚上の発言)

[*húci ek kor an] sir-i ne.*
[フチ エク コロ アン] シリイ ネ.
おばあさん 来る.単 つつ 存在する.単 様子-所属 だ
直訳:「おばあさんが今来ている様子だ。」
「おばあさんが今来ているところだ。」
〔文献2,p.77〕

もう一つは、音を意味する語なのですが、もっと広い意味で使われています。「感じ」や、広く感覚全般を意味しています。「子犬が私のそばに来たような気がした(ように私は思って)」という文を見てみましょう。子犬が寄ってきてクンクンしたり、あるいはなめたりしているときのように、感覚からわかる場合、「*hum-i*(フム-イ)」を使います。

証拠性.非視覚的(感覚上の発言)

[*poyseta en=sam ta ek] hum-i ne...*
[ポイセタ エン=サム タ エク] フムイ ネ…
子犬 私(を)=側 に 来る.単 音-所属 だ
直訳:「子犬が私のそばに来た音だ。」

「子犬が私のそばに来たような気がした(ように私は思って,)」

〔文献6,p.14〕

ほかには、モダリティ、いわゆる話し手の判断としても使われています。例えば、「*nisat-ta tuy k=ek kus-u ne na.*」(ニサッタ スイ ケク クシ-ウ ネ ナ)は「明日来るつもりだ」。また、「*eci=ki kun-i-pne na.*」(エチ=キ クン-イ-ブ ネナ)、あなた達すべし/しなければならない」のような例文です。それから、「*isepo ka cironnup ka tap neno a=hopunpare p ne na.*」(イセポ カ チロンヌブ カ タブ ネノ ア=ホブンバレ ブ ネ ナ)、ウサギの靈魂も、キツネの靈魂もこれこれこういうふうに送るものなのだよ」という例文もあります。先ほどの獵の話によく出てくる例文です。獲った動物の靈魂をカムイモシリにちゃんと送る必要があります。そうしないとまた降りて来てくれないので。降りてこないと食べ物がなくなるし、人間が消滅してしまいます。

それから、アスペクトの意味です。アスペクトとは、出来事の完成度の違いを表す表現です。「*tane ipe=an usi-ke ne.*」(タネ イペ=アン ウシ-ケ ネ)、今食べているところです」。

[*tane ipe=an usi-ke ne.*
[タネ イペ=アン ウシ-ケ] ネ.
今 食事をする=主人公の私(が) ところ-所属 だ
「今食べているところです。」
〔KS #1849〕

その他の意味の人形構文もあります。例えば「*kamuy renkayne e=pa wa e=siknu-re hi ne aan.*」(カムイ レンカイネ エ=パ ワ エ=シクヌ-レ ヒ ネ アン)、神の力でお前が娘を見つけて、生き返らせたということだったのだな」という例文です。「お前」が「ことだ」というのも人魚構文です。

[kamuy renkayne e=pa wa e=siknu-re] **hi** ne aan.
[カムイレンカイネ エ=パワ エ=シクヌ-レ] ヒ ネ アアン
神 お蔭で 貴方(が)=見つける て 貴方(が)
=生きるさせる こと だ ったのだな

「神の力でお前が娘を見つけて、生き返らせたとい
うことだったのだな。」

〔K8106233UP.156〕

そして、「*a=an-te-mac-ihi ikesuy kat-u ne.* (ア=アン-テ-マチ-ヒ イケスイ カツ-ウ ネ)、私の妻が家出したのです」は、直訳すると「有様、わけだ」という意味です。

[*a=an-te-mac-ihi ikesuy*] **kat-u ne.**
[ア=アン-テ-マチ-ヒ イケスイ] カツ-ウ ネ。
主人公の私(が)=存在する-させる-女-所属 家
出する 有様/わけ-所属 だ
「私の妻が家出したのです。」
〔文献1.p.40〕

先行研究では、こういった人魚構文は連体修飾構文として扱われていました。しかし、角田先生のご研究と、今回のプロジェクトのおかげで、これは单一構文だということが分かりました。とてもいい刺激を受けました。今日、金さんからご紹介いただいた統語的なテストをすると、やはり連体修飾構文ではなくて、単文構文だということが分かります。その名詞の元の意味が、だいぶ薄れてきていることも分かります。

それから、アイヌ語の特徴としては、いわゆる二重人魚構文もあります。頭が一つあり、尻尾がさらに長くなっているような構文です。

例えば「*e=unu-hu cis kor e=resu kat-u ne ru-w-e ne na.* (エ=ウヌ-フ チシ コロエ=レス カツ-ウ ネ ル-ウ-エ ネ ナ)、お前の母が泣きなが

らお前を育てくれたというわけなのだ」。直訳すると「その有様だ。その跡だよ」という感じです。こういったものの使用頻度は高いです。意味的に違うたぐいの名詞がよく組み合わさります。

[*e=unu-hu cis kor e=resu*] **kat-u ne ru-w-e ne na.**
エ=ウヌ-フ チシ コロエ=レス カツ-ウ ネ ル-ウ-エ ネ ナ.
貴方(の)=母-所属 泣く つつ貴方(を)=育て
る 有様/わけ-所属 だ 跡-挿-所属 だよ
「お前の母が泣きながらお前を育てくれたという
わけなのだ。」

〔文献3.p.425〕

◆おわりに

アイヌ語の人魚構文は、日本語の影響で発達した可能性もありますし、あるいは、既にアイヌ語にあったものが顕著になってきた可能性も少なくないと思います。アイヌ語は日本語から文法的な影響をかなり受けていると思います。誰もまだ研究していなかったことですが、これから詳しく見ていきたいと思います。

逆はどうかと言うと、日本語はアイヌ語の文法から全く影響を受けていません。そういうものは一つも思いつきません。あったとしても借用語がある程度です。「シャケ」や「シシャモ」などはご存じのように



アイヌ語話者から聞き取りを行う講演者

アイヌ語ですが、文法的なレベルでは、そういうものはありません。
ご清聴ありがとうございました。iyayraykere(イヤイライケレ)。

略号

() = 原文にはない追加情報

単 = 単数

複 = 複数

所属 = 所属接尾辞

挿 = 挿入子音

語文化論集』5, 111-143 頁. 千葉: 千葉大学.

- 6 佐藤知己 (2011) 「アイヌ語千歳方言における推量の助動詞 nankor の意味について」『北海道立アイヌ民族文化センター研究紀要』17,1-18 頁. 札幌: 北海道立アイヌ民族文化研究センター.

その他

K Nakagawa, Hiroshi & Anna Bugaeva . A corpus of folktales of the Saru dialect of Ainu by Mrs. Kimi Kimura (1900-1988) [deposit 1]. ELDP, SOAS, University of London.

<http://elar.soas.ac.uk/deposit/bugaeva2012ainu>

KS Bugaeva, Anna & Shiho Endō (eds.) (2010) Setsu Kurokawa (speaker) & David Nathan (multimedia developer) . 金澤版 アイヌ語会話辞典・音声 黒川セツさん [A Talking dictionary of Ainu: A new version of Kanazawa's Ainu conversational dictionary with recordings of Mrs Setsu Kurokawa]. ELDP, SOAS, University of London.

<http://lah.soas.ac.uk/projects/ainu/>

文献一覧

- 1 田村すず子 (1984) 『アイヌ語資料』1. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 2 田村すず子 (1988) 「アイヌ語」亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編『言語学大辞典』東京: 三省堂.
- 3 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』東京: 草風館.
- 4 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』東京: 草風館.
- 5 中川裕 (2002) 「アイヌ語口承文芸テキスト集 3」『ユーラシア言

